

令和3年 神奈川県議会 国際文化観光・スポーツ常任委員会にて質疑いたしました。

小野寺

まず、クオリティツーリズム、質の観光と訳せばいいのでしょうか、その推進について何点かお伺いします。

午前中の質疑でもありましたように、新型コロナウイルスの感染拡大でインバウンド需要が激減したことによって、観光産業が深刻な打撃を受けていることは承知しているところですが、今後、海外からの観光客がどうなるのか先行きが不透明な中で、この機を捉えて、いわゆる量の観光、クオンティティーツーリズムから、質の観光、クオリティツーリズムに転換するための準備をしっかりと行っておくべきなのではないかと考えています。それは、観光消費額を増やし、一方で世界中の観光地が抱えているオーバーキャパシティ、オーバーツーリズムという課題の解決につながる取組でもあると思っています。そこで、クオリティツーリズムの推進について何点かお伺いします。

初めに、観光を量から質へと転換するため、県としてどのようなことが必要だと考えているのか、御認識を伺います。

観光プロモーション担当課長

観光の質を高めるためには、長期滞在による消費額の増大、コンテンツの磨き上げ、優秀なガイドによる観光客の満足度の向上などの取組を一層充実させることが重要と考えています。そうした取組によって、観光消費額総額を引き上げ、地域経済が活性化すると考えています。また、持続可能な観光を実現するためには、文化や遺産の保護、継承、自然環境の保全、住民生活環境との共存などに配慮することも必要と考えています。

小野寺

質への転換は、観光客1人当たりの消費単価にも表れてくると思います。今の消費単価の現状と、この観光消費を高めるためにどのような取組を行っているのかを教えてください。

観光プロモーション担当課長

観光庁の統計によりますと、2019年の神奈川県における観光消費額単価は、国内観光客の宿泊客は約2万7,000円です。外国人観光客の宿泊客については約6万5,000円となっています。また、国際会議や展示会、見本市など、いわゆるMICEに参加する外国人ビジネス客の消費単価は、観光庁の調査によりますと約34万円となっています。これは、通常外国人ビジネス客の2.3倍となっています。

こうした中、県では観光客の消費単価を高めるための取組として、外国人観光客やビジネス客に特に人気の高い、通常では見学や体験ができない特別感のある体験型コンテンツの発掘・磨き上げに取り組んでおり、昨年度は10のプロ

グラムを造成しました。例えば、鎌倉の例ですが、陶芸、書道などで著名な北大路魯山人が使用した其中窯という窯を貸し切った作陶体験や、地場産品を用いたミシュラン掲載店の料理人による食事のプログラムなどを造成しました。

小野寺

外国人観光客は高効率に観光収入が得られることは分かりましたが、せっかくつくったプログラムがコロナ禍で実績を挙げられず残念だと思います。ただ、私が申し上げているクオリティツーリズム、質の観光とは、もちろん高級、高額路線も含まれるわけですが、必ずしも富裕層しか楽しめないというものではないと考えているのです。その土地の文化的な価値、景観なども含めた環境的な価値に正当な対価を払ってくれる人たちが、クオリティツーリズムの担い手なのではないかと思っています。抽象的なお尋ねの仕方ですが、そうした上質なお客様を呼ぶための方策について、考えていることがあればお伺いします。

観光プロモーション担当課長

訪日外国人観光客の旅行形態としては、今後も、さらに団体旅行から個人旅行化が進み、日本の伝統文化や歴史などの本物を求める傾向が一層強くなってきています。そうした観光の質を求める観光客のニーズに応えるため、観光地や観光施設の歴史や背景など、その魅力を伝えることができる専門性の高い人材の確保、育成が重要であると考えています。そのため、今年度は、通訳案内士や意欲のあるガイド人材を対象に、体験型コンテンツなどの理解を深め、そうした体験型コンテンツを活用したツアー造成方法などを学ぶ神奈川県外国人観光客向け体験型ガイド養成講座を開催しており、質を求める観光客の受入体制の整備に取り組んでいます。

小野寺

まだ、外国からたくさんのお客様を迎えられる状況ではないので、国内のお客様や私が前から申し上げている、東京にビジネスで長期間滞在をしている外国人のビジネスマンの方々、彼らは週末に結構休暇を取って、近場でリラクゼーションし、和める文化的な価値のあるところに触れる、ことを望んでいるので、まずはそういう人たちをどのように楽しませるかというようなことも、予行練習みたいな形で考えていただければと思っています。

また、先ほど御答弁にありました鎌倉などでは、皆様も御承知のとおり、オーバーツーリズムに悩まされていると承知しているわけですが、具体的にはどのような問題があって、県としてはどのように解決を図れるのではないかと考えているのか、その辺りをお伺いします。

観光プロモーション担当課長

鎌倉においては、観光客が多数訪れ、渋滞や混雑、迷惑行為やマナー違反などが発生していると聞いています。例えば、江ノ島電鉄の鎌倉高校駅前付近の踏切では、アニメの聖地として知られていますが、多くの観光客が押し寄せ、危険な撮影などの迷惑行為も行われていました。

オーバーツーリズムは課題であると認識していますが、今のところ決め手となる解決策があるわけではありません。そうした中でも、県においてはオーバーツーリズムを回避する施策として、時間や場所の分散化を図る取組を行っています。例えば、お寺や寺社への早朝参拝、食事を促進する、いわゆるモーニ

ングタイムエコノミーに関するコンテンツの発掘による時間の分散化、あまり知られていない観光コンテンツの魅力を開掘・磨き上げ、周遊モデルコースを示すことで、観光客が人気スポットに集中し過ぎないよう場所の分散化を図ることなどです。

今後とも、質の高い観光を実現するため、オーバーツーリズムの解消に向け、どのような取組が有効か、地元市町村と連携して検討を行っていきます。

小野寺

オーバーツーリズム対策とは、1つは総量規制だと思います。エリア内に入るための課金を高額にする、完全予約制にする、地域によっては観光バスの市内への乗り入れを規制するなど、いろいろなことが行えると思います。もう1つは、今、御説明があったように、人の分散化を図る誘導対策という、この2つのアプローチがあると思っています。ただ、総量規制につながる施策については、ただでさえコロナ禍で傷ついている観光業界の反発が必至ではないかという懸念も持っています。県としては、ぜひ、国内外の事例をよく研究していただき、当該自治体はかなり悩んでいると思いますので、しっかりと背中を押してあげていただきたいと思います。

また、全国の自治体が魅力をアピールしているわけですが、どうもB級グルメ、ご当地キャラなど、どちらかというサブカルチャー路線のようなところが目立つ印象があるのです。先ほど議論した上質な観光客というところにもつながるのですが、B級とかサブカルチャーというものは、A級やメインカルチャーがあつてのB級やサブカルですから、そこをしっかりとつくらないといけないということなのです。わい雑な面白さというものも、もちろんあると思うのです。ただ、それを売り物にしてしまうと、そのイメージが定着します。例えば、山下町のK A A T神奈川芸術劇場の隣にハイアットリージェンシーができました。そこへ行っていただくと分かるのですが、そのエントランスの前に電信柱が立っているのです。恐らく世界広しと言えども、ハイアットリージェンシーの正面玄関の前に電信柱が立っているのは横浜だけではないかと思うのです。私の友人のアメリカ人のジャーナリストに言わせると、それでいいのだと、電柱は日本の名物だと言うのです。もし、電柱がサブカル的に面白がられて、それで人が来たとしても、外国人に東京や横浜の電信柱を巡るツアーを用意されても気持ちが良いかというところがあるのではないのでしょうか。例が適切かどうかは分かりませんが、ぜひ、A級とB級のゾーニングをしっかりと行うなどして、A級の文化に触れたいという観光客を呼び込むための様々な対策を考えていただきたいと思います。

次の質問に移ります。神奈川らしいビーチスポーツの振興ということで、ビーチスポーツ、マリンスポーツ両方について伺います。

今回の報告事項の中に、オリンピック・パラリンピック終了後のレガシーを継承する事業として、モニュメントや銘板の設置、記録誌等の作成及び文書等の引継ぎなどが挙げられていました。それらはもちろん重要なことであると思っています。これまで何度か申し上げてきたと記憶しているのですが、私は最大のレガシーはセーリングというスポーツの大衆化だと思っています。そこで、セーリングの裾野を広げる取組として、前回の委員会でもお尋ねしたので、こ

の前の質疑以降どのような進捗があったのかお伺いをしたいということと、あわせて、来年度以降に検討していること、これは現在予算編成中なので、なかなかお答えにも限りがあると思うのですが、答えられる範囲で教えてください。

オリンピック・パラリンピック課長

県として、セーリングを普及する取組は従前より検討を進めています。最近の検討としては、セーリングに触れる機会を確保することが効果的であるという観点から、マリナーを訪問して、現場の状況や希望などをお伺いしていました。その中では、セーリングの普及における課題として、認知度が足りず、気軽にセーリングを行うことのできる環境が少ないといったことも言われました。そうした課題を踏まえ、現在、私どもは検討を進めています。例えば、セーリングを実際に体験して魅力を感じていただくような取組や、マスメディアを通じてセーリングの魅力を広報すること、また、セーリング団体が実施する体験会などを私どもからも周知していくといった取組を考えているところです。

いずれにしても、私ども県単独ではなかなかこういった事業は進められませんので、これからも競技団体やマリナーなどと連携しながら検討を進めていきたいと思っています。

小野寺

オリンピックまではさんざん盛り上がって、終わると何かしぼんでしまうということを私はとても懸念していますので、引き続き継続的に取り組んでいただきたいと思います。

神奈川県は、県の面積と比べるととても長く美しい海岸線を持っているといった特徴があると思うのです。また、海岸からすぐに都市文化が広がっているということもすばらしい特徴だと思っています。そういった環境を生かして、海、海岸を利用するスポーツ、アクティビティを広げて、それを盛んにすることは極めて神奈川県らしい取組だと思っていますのですが、市町村や団体等の活動の状況を把握していれば教えてください。

スポーツ課長

本県は、マリンスポーツの聖地として、江の島を中心に、これまでもオリンピックをはじめ各種大会が実施されてきました。また、広い海岸線を有する立地を活用したビーチスポーツについても、本県の鶴沼海岸が日本のビーチバレー発祥の地であることや、ビーチサッカーやビーチラグビーなどができる平塚ビーチパークなどもあり、スポーツやアクティビティが活発に行われてきた土壌を有していることから、海岸沿いの市町や民間団体によるイベントなども数多く開催されてきたものと認識しています。

小野寺

平塚ビーチパークのような試みは、もっとたくさん行われると良いと私も思っています。

競技団体の皆様も、一生懸命裾野を広げるために頑張ってくださいと思っているのですが、どうしても競技型の指導になってしまうという話も聞いています。一方では、海辺では新しいいろいろなスポーツが生まれてきています。今後、海辺のスポーツの振興に向けた取組として、県としてどのように考えてい

るのか教えてください。

スポーツ課長

本県では、東京 2020 大会で実施された江の島でのセーリングをはじめ、多くのマリンスポーツがこれまでも多く生まれてきました。こうした海岸環境に恵まれた本県では、マリンスポーツ、ビーチスポーツは身近に感じられる反面、大会やイベントを開催するには海岸の占用許可を取る必要などから、一定の手続を取らなければならない現状もあります。しかしながら、本県の特徴とも言える海や海岸を有効に活用し、マリンスポーツやビーチスポーツを広めていくことは有意義なことと感じており、特に海を舞台にしたスポーツでは、海流や風の仕組みなどの自然を理解することなどが必要となることから、環境教育の面からも重要な取組であると考えています。今後、こうした取組を行っていくために、まずは海やその周辺を舞台にしたスポーツに触れてもらうといった敷居の低い入り口が必要であると思いますので、市町や関係機関などとも情報共有を図りながら、競技団体や地域スポーツクラブなどとも連携した取組について検討していきたいと考えています。

小野寺

今の御答弁のとおり進めていただきたいと思います。私も、今回の質疑を行うに当たって、(一社)ビーチフラッグ全国ネットワークというところへ話を聞いてきたのですが、そこではスポーツ、アクティビティを種目別に細分化するのではなくて、今おっしゃったように、波、風、水の流れ、重力といった自然のエネルギーを利用するスポーツをアーススポーツと名づけ、それこそはだしになって砂浜を歩くことにより、基本的な正しい体の使い方を子供たちから高齢者に教えているというプログラムを実践しているとのこと。スポーツカイトもセーリングも結局風を利用するという同じ基本メソッドに基づいて教えていると聞いて驚いたのですが、そうした活動をしている団体もありますので、しっかりいろいろ協力していただきながら、今おっしゃったように敷居をできるだけ低くして、老若男女が参加できるような形を取っていただきたいと思います。

私は、令和元年9月の第3回定例会で、かながわシープロジェクトのさらなる推進というテーマで取り上げました。そのときに、マリンスポーツのコアなプレイヤーばかりではなくて、ジュニア層からファミリー層、シニア層まで幅広く楽しめる海岸を創出するためにはどうすればいいのかとお尋ねして、知事からは、海岸を訪れた人がウインドサーフィンやビーチバレーなどのスポーツに加え、ヨガや砂浜遊び、自然観察教室などの様々なコンテンツをいつでも楽しむことができる空間をつくっていきたいという御答弁を頂きました。そのとき、このシープロジェクトの所管課は地域政策課でしたが、内容的にはスポーツ、体を使ったアクティビティも少なくありませんので、ぜひ、今後はスポーツ局にも積極的にコミットしていただきたいと思いますと要望を申し上げて私の質問を終わります。